

三島通陽総長のボーイスカウト十話

新藤信夫

後藤新平の最後のことば

日本に初めて少年団ができたには、大正2,3年ころで乃木の部下だった伊勢少将は乃木に勧められていたが乃木没後、大正3年に小柴博らと発団式をあげた。この頃京都の中野忠八ら、静岡の尾崎元治郎、深尾韶らとあちこちで少年団を作り始めていた。それが皇太子(昭和天皇)の英国でのお言葉を聞いて奮起して静岡で代表者が集まり、少年団日本連盟の結成を見たのは大正13年(1922)4月13日であった。総裁(のちに総長)には、後藤新平子爵を迎え、理事長にはご渡英のお供をした二荒芳徳が決定した。しかし、その頃の少年団の中には、ボーイスカウトもあったが、所謂子供会の様なものから、兵隊ごっこ様なものと種々雑多であったから、後藤はまずハッキリとボーイスカウトで行くとの方針を決め、ボーイスカウト世界事務局へ申請登録をして、世界の一員となって出発した。

それで、後藤はその年の8月、コペンハーゲンで開かれる第2回世界ジャンボリーには、まず各地から指導者を多く出して学ばせようとの方針を決めた。派遣団長には若かった私(三島通陽)が任命されたので、副団長には尾崎元治、スタッフには久留島武彦、中野忠八なぞの年配者をつけ、顧問に佐野常羽を任命し24名で行くことになった。佐野は自分の団の子3人を自費で連れて1便前便で渡英し、ギルウエル訓練所で訓練の上参加した。これらの派遣員は全部帰ってからそれぞれ死ぬまでこの道に尽くした。中でも佐野はロンドン郊外にあるパウエル卿直伝の指導者訓練所に入所して訓練を受け、卿とも親交を得て直接教えられ研究を続けて帰ったので、後藤は彼(佐野常羽)を初期の日本指導者訓練所長にして研鑽を続けさせた。

後藤は、このようにパウエル卿の奥義を研究させる傍ら、日本古来の郷中制度などを研究させたが、自らも鹿児島へ行って、じいさん、ばあさんを集め郷中の話を聞きだした。私はそのそばにいたが、何しろ後藤はズーズーの東北弁だし爺さんたちは薩摩弁と来ているのでお互いに話が通じない。それで私はいちいち通弁をした事もあった。

晩年の後藤は、私が見るところではスカウト運動に一番熱心だった。「後藤さんも、もっと総理大臣になるようなことをしたらいいのに、ガキ大将とは・・・」と言って笑われても一向平気でユニフォームを着て日本中を飛び歩いた。

中略

後藤は昭和4年4月3日自邸に集まったスカウトたちに囲まれ嬉しそうに遊んだ上、夜行で岡山に講演で向かったが、車中、脳溢血で倒れた。京都で降ろされて京都病院へ運び込まれた。後藤重体の知らせで、側近者や我々も京都に集まった。はじめ京都病院は満員で病室なく、やむなく受付に寝かせた。院長が心配してよい病室を開け移そうとしたが、もう口もきけぬ後藤は、首を振ってイヤという。そこでみんなで相談の結果、スカウトに抱かれてなら引越すだろうと、私に白羽の矢が立った。私は「先生、引越しをしましょう」というと首を振る。「いや、スカウトが先生を抱いて行きます」というとニッコリしてうなずいた。それで京都団長の中野忠八と10数人のスカウトが、後藤を取り巻きみんなでそっと抱いて運ぶ。後藤ははじめ嬉しそうに一人一人の顔を見つめていたが、次第にホロホロ涙を流し出した。

後藤は東京を立つ前、私を近くに呼び「よく聞け、金を残して死ぬものは下だ。仕事を残して死ぬものは中だ。人を残して死ぬものは上だ。よくおぼえておけ」といったのを思い出した。私も後藤を抱きつつ涙が流れた。後藤は4月13日にこの世を去った。思えばこれが後藤総長の最後のことばだったのである。

(1897~1965 元日本連盟総長)

もう一つの 後藤新平総長のお言葉 (自治の三訣)

「人のお世話にならぬ やう 人のお世話をするやう そして報いを求めぬやう」